

現場で使える！研究成果

イチゴ「恋みのり」の病害耐性

既存品種に劣らず

イチゴ「恋みのり」は連続出蓄性に優れることや摘花作業が少ないことから県内の栽培面積が増えているが、各種病害に対する発病特性は明らかでなかった。このため、イチゴの重要病害である炭疽病や萎黄病の防除対策に役立てることを目的に、これらの病害による発病の特性を既存品種の「ゆめのか」や「さちのか」と比較した。

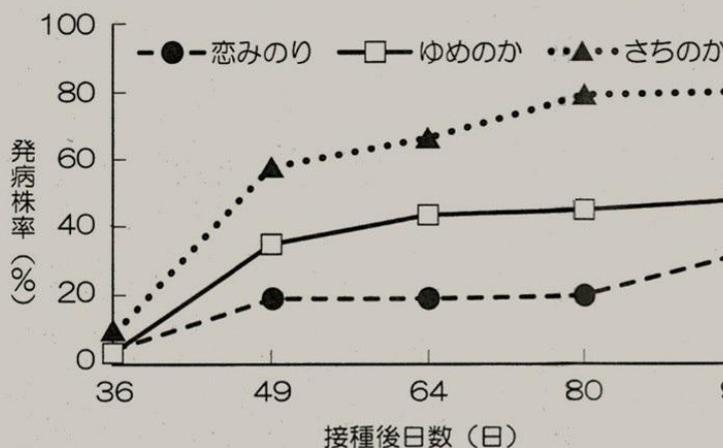
接種試験の結果、炭疽病の発病株率は接種35日



写真 炭疽病菌接種57日後の発病程度(2021年)

後には33品種とも100%に達したが、接種57日

図 イチゴ萎黄病の発病推移(2022年)



後の萎凋枯死株率を見ると恋みのりでは2・8%にとどまり、ゆめのかの69・4%、さちのかの50・0%と比較して病勢の進展がやや遅く、萎凋枯死する株が少ないこと

が明らかになった。写真。また、萎黄病の接種から約3カ月間の発病株率は、恋みのりではゆめのかと同様かやや低く、さちのかより低く推移した。図。

以上のことから、恋みのりはゆめのかに比べ炭疽病に対してやや強く、萎黄病に対して同等からやや強いと考えられた。炭疽病や萎黄病の発病株は、見つけ次第速やかな撤去と適切な処理が求められるが、症状が軽度の場合

には発病株を見落とすやすすく、本圃に持ち込むリスクが高まるため十分な防除対策が必要だ。(長崎県農林技術開発センター 環境研究部門 駒場あすか)